

「やめたわ」

—初稿—

2024/3/20

雨森 れに

〈人物表〉

齊藤 良晴 (64) トーダ商事の部長。別名、仏の部長。

田中 圭介 (55) 齊藤の直属の部下。猫好き。

小林 幸恵 (42) ヒステリックなお局

部下A

部下B

〈ログライン〉

定年制度廃止を知った齊藤が、地域猫と触れ合った際に猫にまでいい顔したくなった自分が嫌になり、保護猫活動するために仕事を辞める。

〈ねらい〉

第二の人生。イイヒトの意味。

1. トーダ商事・部長室（昼）

掛け時計が午後2時を指している。デスクの上には
沢山の資料や書類。

老眼鏡をした斉藤良晴（64）がパソコンを操作し
ている。

手が止まり、老眼鏡をずらして険しい表情で画面を
見つめる。

画面には「定年退職制度廃止について」と大きく載
っており、その下に廃止についての経緯が続いてい
る。

ドアのノック音。

扉が薄く開き、田中圭介（55）が顔を覗かせる。

田中 「今、いいですか」

斉藤、眼鏡を掛け直し、人が好きげに笑って手招き
する。

田中は斉藤の横へ。

田中、深刻そうな顔。

田中 「定年なくなったの、見ました？」

斉藤 「今見た。ビックリなんてもんじゃないよ。いつからこん
な計画進んでたんだか」

田中 「じゃあ部長も知らなかったってことですか」

斉藤 「自分が関わってたらあと2年は遅らせるよ。64歳だし
な」

田中 「えーっ」

斉藤 「60までが65までに延びて、ゴール目前でこれだ」

斉藤、老眼鏡を外して、疲れたように目頭を揉む。

田中、何と言えばいいかわからない様子。

斉藤 「田中くんもさ。早期退職枠狙ってただろ」

田中 「そうなんです。本当にやりきれないですよ！ いや自
分なんかに比べたら部長のがやりきれないですよね」

斉藤 「みんな人生プランがあるんだから、比べるもんじゃない
よ」

斉藤、困ったような田中の表情を見て、その首から
下げてある社員証入れに視線を移す。

社員証入れには猫のステッカーが貼ってある。

田中 「今から動いても間に合わないですよね」

齊藤 「俺も上の方に確認しておくから、田中くんのほうでも情報集めてくれないかな？」

田中 「人事に同期がいるんで、そのへんからいってみます」

齊藤 「よろしく」

齊藤、田中を見送る。

田中と入れ替わりで苛立たしげな小林幸恵（42）が入ってくる。

齊藤は笑顔を崩さない。

幸恵 「（書類を差し出しながら）部長！ このフォーマットがわかりにくくて。変更したいんですけど」

齊藤 「この書類だと編集の権利が必要だから俺がやろうか。どのへんが問題かな」

幸恵 「なんで権利が必要なんですか？ 現場の人間が編集できないなんておかしいです」

齊藤 「そうだよ。自分の一存ではなんともできないんだけど、そう思うよ。何かの折に話を通してみるから。ね」

幸恵、気に入らないという表情で、

幸恵 「わかりました。（書類にマルをつけながら）この表記と言い回し。あとココとココです」

齊藤、書類を確認する。

ドアのノック音。

部下Aがドアを開ける。

部下A 「部長……あ、あとでのほうがいいですよね」

齊藤 「あー（幸恵を気にして）もう少しあとにしてくれると嬉しいかな」

幸恵 「私はもう終わりなんで大丈夫ですよ」

幸恵、来た時と同じように苛立たしげに出ていこうとする。

齊藤 「あ、ちょっと。どこがどうわかりにくいか教えてもらえないと」

幸恵 「チャットします！」

部下A、出ていく幸恵を避ける。

部下A 「なんか、すみません」

斉藤 「いいよいいよ。それでどうしたの」

斉藤、笑顔を崩さずに対応する。

× × ×

斉藤、パソコンを閉じる。

掛け時計は午後9時を少し過ぎたところ。

斉藤は疲れたように首と腕を回し、立ち上がる。

2.

商店街（夜）

会社近くの商店街。飲み屋と定食屋数軒だけが営業
していて少し寂しい感じ。

仕事帰りの斉藤が歩いている。

脇道から猫の声。

斉藤、脇道に入り猫を見つける。

猫の耳は先端が欠けている。

斉藤 「さくら猫だな」

3.

（回想）商店街（昼）

蕎麦屋から出てくる斉藤。

田中 「ほら、ちゃんと食え」

斉藤は脇道でしゃがみこむ田中を見つける。

斉藤 「田中くんじゃないか。どうした」

田中、素早く振り向き、口元に指をあてる。

田中 「しーっ猫が逃げちゃうんでゆっくり来てください」

斉藤 「ね、ねこ？」

田中の足元には餌をもらうノラ猫。耳が欠けている。

田中は猫の背を撫でている。

田中 「さくら猫ですよ。餌あげていい猫です」

斉藤 「餌あげていいって……そんなノラ猫いないだろ」

田中 「地域で避妊手術してあげた、増えない猫だからオツケー
なんですよ」

田中、猫の耳を指差して

田中 「こうやって耳をさくらみたいにカットしてあるのが印で
す」

齊藤 「初めて聞いたよ。詳しいね」

田中 「将来、早期退職して、こういうの込みで保護猫活動するのが夢なんですよ」

齊藤 「いいね。自分も猫好きなんだよ。最後に飼ったのは20年前だけど……なかなかね」

田中 「すぐに次の猫ってできませんよね……よかったら触りますか。慣れてるんで大丈夫ですよ」

齊藤、猫に指を近づける。

齊藤 「ほんとだ。人懐こいなあ。久しぶりだなあ」

齊藤は嬉しそうに笑う。

田中 「飼わなくても、こうやって猫活したらいいですよ。さくら猫もいるし猫カフェもあるし」

齊藤 「そうだなあ……」

4. 商店街（夜）

齊藤は猫を驚かせないように近くにしゃがみこむ。
鞆の中を漁り、猫のおやつを取り出す。

齊藤 「ほら」

齊藤、おやつを食べる様子を嬉しそうに眺める。

別の猫の声。

脇道の暗闇からノラ猫。耳が欠けていない。

齊藤 「お前は……だめだな」

おやつを鞆にしまう。

齊藤は人のよさそうな笑顔のまま、さくら猫とノラ猫を見比べる。

おやつをねだる鳴き声。

鞆からおやつを出しそうになり、やめる。

齊藤から笑顔が消え、ため息。

齊藤 「辞めるかあ」

5. トーダ商事・部長室（昼）

齊藤は幸恵にもらった書類を返す。

齊藤 「熟考した上で、君と同じ業務の人間に意見を聞いたよ。このままでいいそうだ」

幸恵 「なんですか！ 私が使いにくいんですよ！」
齊藤 「それで、君に合わせて変えた場合を法務部に確認したら、あまり正しくない表現になるって。変えたほうが問題になる」

齊藤、笑顔を消して無表情に。

幸恵、怒りを隠せない様子で書類をその場で破り捨て、乱暴に出ていく。

田中が開け放たれたドアからおそるおそる入ってくる。

田中 「部長もきっぱり言う事あるんですね」

齊藤 「うん。俺、イイヒトやめたわ。みんなにイイ顔するのはおしまい」

田中 「定年を失った男は強いつてことですか」

齊藤 「どうか、もうこの仕事辞める」

田中 「えっ？」

齊藤、歯を見せた笑顔で、

齊藤 「お前も辞めれるぞ。あと10年で定年だった奴を対象に早期退職制度が活きるんだと」

田中 「ほほんとですかあ！」

齊藤 「そして俺も保護猫活動する！」

田中 「えええええ？」

齊藤 「猫を幸せにするんだ。定年がないならそういう仕事をしたいんだよ」

田中、呆れたように笑う。

田中 「斎藤さんって熱い人間なんですネ。すごく好きです、そういうの」

6. 商店街(昼)

部下A、部下Bと定食屋から出てくる。

部下B 「仏の部長、辞めるらしいね」

部下A 「なんか定年間近だった人たちの早期退職もぎとって辞表出したらしいよ」

部下B 「へー！ やっぱイイヒトだわあ」

部下A 「辞める理由も保護猫活動したいからだって。田中さんが

言ってた」

部下B「ザ・善人じゃん。やっぱ仏だったんだね」

7. トーダ商事・部長室（夜）

段ボールを抱え、出ていく斉藤。

何もなくなったデスクだけが残されている。

おわり